日中福祉プランニング代表　王　青

王さん

Report

# 中国の家族事情

## 介護の支えは「家族の絆」

## 自助優先社会に変化の兆し

中国は、36年間に及ぶ「一人っ子政策」の影響で、少子高齢化が急速に進んでいます。今年5月に発表された10年に一度の国勢調査では、65歳以上の人口は10年前と比べると6割も増えて、1・9億人となり、人口率は13・5%を占めています。一方、2020年の新生児数は1200万人で、前年より2割減、3年連続の減少となりました。政府は16年に「一人っ子」政策に終止符を打ち、その後2人目の子どもを容認、今年5月に「3人目」政策を発表しましたが、あまり効果がないと世間では見ています。少子高齢化の深刻さは増していくだけだと厳しい声も多々聞こえてきます。

### 共働きが当たり前　孫の世話は老後の生きがい

中国は、昔「三代同堂」や「四代同堂」（三世代、四世代が同居）が伝統であり、家の高齢者を家族みんなで支えることが当たり前でした。しかし、経済の発展で人口の流動が活発となったことで、大家族のような家庭様式が崩壊し、核家族が増えていきました。それでも、できる限りお年寄りを家族で面倒みるという風潮は変わっていません。

中国はほとんどの家庭が共働きのため、定年を迎えた多くの夫婦はともに家事を分担し、孫の面倒をみます。厳しい社会競争の中で残業や出張が多い子ども世帯（若夫婦）がみきれない子どもの面倒は、親世帯が助けることが当たり前な社会となっているのです。ゆえに、平日には子どもを実家に預けて、週末だけ若夫婦一家で過ごすケースも多く見られます。祖父母からすれば、孫の面倒を見ることが自分たちの「生きがい」と感じる人も多いのです。

このような中国の家族光景は、日本人から見れば不思議に思うかもしれません。一般的に、日本の高齢者は日常的には孫の面倒を見ないことが多いし、自分の人生を楽しみたいと考えているのではないでしょうか。これに対して中国人は「え？孫が可愛いと思わないの？」と、逆にびっくりして、考えられないと言います。

### 家族の面会頻度が幸せのバロメーター

近年、中国はITイノベーションが進み、スマホ決済やデリバリーなどが発達しています。これらにより、中国には日本のような、高齢者の「買い物難民」が存在しません。なぜなら、たとえ高齢者がスマホの操作ができなくても、子どもが指一本で親が必要とする食材や日常用品を遠方からでも届けることができるからなのです。

中国の家族間の関係はとても緊密であることが表れていると思います。そして、孫とは関係なくても、大半は親子や兄弟の間で日ごろから頻繁に連絡し合っているので、何かがあれば、まず家族で解決しようと思うことが殆どです。時代の変化もあり、近年は親を介護施設に入れることも徐々に受け入れられるようになってきましたが、内陸にいくほど、世間からの風当たりが強い、肩身が狭くなるのは今も同じです。現在も多くの家庭では、70代の子が90代以上の親を介護している「老々介護」が普通に見られる光景となっているのです。

そうは言っても、近年、自宅で親の面倒を見切れず、施設に預けることは年々増えつつあるのは確かです。ただ、日本のように介護保険が完備していない状況で、入居費用を全額自己負担しなければならないため、高齢者自身の年金では足りず、家族の援助が必要となるケースがほとんどです。そして、高齢者は施設に入居しても、家族に対しての思いは強いまま。家族が会いに来てくれるかどうかは大変気になるところで、いわば家族が見舞いにくる頻度が幸福度を左右すると言っても過言ではありません。

そのため、各施設は家族を施設に足を向かわせるために、様々な工夫や取り組みをしています。例えば、小さい子どもが遊ぶコーナーを設ける施設が増えてきていますし、ある一部の民間施設は、入居時の契約書に「特別なケースを除き、1カ月の間に施設に面会に来ないと、入居料を値上げする旨を、施設から家族に連絡する」などを明記しています。中国の介護施設に行けば、どこでも家族が親の好きな食べ物を持って見舞いに来ている光景を当たり前のように見かけるものです。そして、春節（旧正月）や国慶節、敬老の日などのお祝の日にイベントを開催し、家族に参加してもらうようにしています。

上海にある民間の施設では、家族用のキッチンスペースを設置していました。休日などに家族が入居者の親の好きな料理を作って食べさせたり、また、親子水いらずで一緒にご飯を作ったりして、昔の生活に戻る楽しいひと時となっており、大変好評だそうです。

また、完備しているIT環境も入居者と家族とのつながりを助けています。昨年からの新型コロナウイルスの蔓延で、多くの地域において介護施設が封鎖されました。家族との面会ができないのが入居者にとっては一番堪えられないので、各施設はスマホやタブレットを活用して、音声や動画で家族とつなぎ、入居者の気持ちを落ち着かせていました。今では電話のかわりに、音声通話や動画などが家族と連絡する欠かせない手段となっています。

このように中国では国の社会保障が整備されていない中、家族が高齢者の支えとなっているのは間違いありません。そして、高齢者自身も政府ばかりに頼ることはなく、自分の健康は自らの手で守るという自助意識が強いのです。そのため、朝の公園や緑地などでは、高齢者が自発的に太極拳や体操をやっているのが日常の光景となっています。近年、すっかり「名物」となった「広場ダンス」は、広場、歩道などの公共スペースで、中高年の女性たち（最近男性も加わってきた）が集まり、音楽に合わせて踊るものですが、これらは、体を動かすだけではなくて、人とのコミュニケーションによって心身ともに健康的になれるので人気となっているのです。

今の70代以上の高齢者には子どもが何人もいるため、子どもに頼れます。しかし、既に一人っ子の親が高齢者になり始めていますし、実は、すでに老夫婦のみや一人暮らしの世帯が急増しています。「一人っ子」同士の夫婦には4人の親がいて、場合によっては、祖父母も健在しています。とても面倒を見切れない現実が次第に広がっているのです。家族のみで支え切れない時の老後はどうなるのでしょうか。家族だけではなく、社会全体が高齢社会を支えるためには、さまざまな課題が見えてきているところです。

お問い合わせは…
環境新聞社 シルバー新報 販売部　TEL.0120-1972-65　〒160-0004　東京都新宿区四谷3-1-3　第1富澤ビル